

中国植林協力の現場では (5) 小老樹

【グニャグニャにねじ曲がった樹木】

その奇妙な林に最初に意識を止めたのは、1993年の秋だった。それまでに何度も私は大同にきており、まちががなくその林を目にしているのに、なんの注意も払わなかった。風景に樹木があるのは日本育ちの私にはあたりまえのことで、黄土高原の樹木のない風景に目を奪われていたのである。

地元の人たちはその林を「小老樹」(シャオラオシュー)と呼んでいる。大きなものでも3~4m。グニャグニャに曲がっているものが多い。なかには切られるか枯れるかした株元から、ひこぼえがブッシュ状に茂っているものもある(写真1)。

中国では「小」や「老」に親しみをこめ、愛称や敬称に用いるから、私たちが字面から受ける「小さな老いぼれの樹」とはニュアンスがちがうかもしれない。しかし、小老樹のなかに墓がつくられたり、ごみが捨てられたりしているようすを見ると、敬意を払っているとは思えない。

【建国直後からの大緑化運動】

私は最初、これらの樹木を自然に生えたものと考えたのだが、地元の老人の話では、「建国直後に村人が総出で植えた」ということだった。樹種は小葉楊(*Populus simonii* Carr.)で、この地方の在来種のポプラ。建国とは1949年の中華人民共和国の成立を指す。

首都は北京に決まったが、大同はその水源にあたり、風砂の吹き出し口でもある。山西省北部の山中に発した桑干河は大同の中央部を西から東に流れ、河北省にはいって洋河、壺流河と合流して永定河と名を変える。河北省と北京市の境界で永定河をせき止めているのが官庁ダムで、現在でも密雲ダムとならんで2つしかない北京の水ガメの1つである。

河北省と山西省の境界には、東西の幅が最大180km、南北の延長は400kmという太行山の大山脈がある。そしてその北には大馬群山脈、北京を取り囲

むかたちで燕山山脈があり、その山脈の切れ目の低いところを桑干河・永定河が流れている。北京のほうからみれば、春先の風砂はここから吹き出してくるようみえ、風口と呼ぶ。

水源涵養と風砂防止のために、建国直後から桑干河流域を中心に大緑化運動が取り組まれた。苗を育てるのがまにあわないので、ポプラの枝を現場に挿す簡単な方法を採用したそうだが、各県の面積の4分の1から3分の1も植えたのだから、大事業であることはまちがいない。建国の情熱が国土の緑化へも向けられたのである。

【順調に育った樹木が途中から暗転】

ある段階までは順調に育ったようだ。1960年代には、「南の湛江、北の雁北」といって、緑化の全国モデルになったこともある。湛江は海南島の対岸にある広東省の県(現在は市)、雁北は「雁門関の北」の意味で、大同の周囲の農村地区がそのように呼ばれていた。ところが、その後、その森林は急に暗転してしまった。

私たちのボランティアツアーを世話してくれたバスの運転手の馬瑞さんが、自宅付近の小老樹の林で



小老樹の林。夏になると緑におおわれる。枯れ葉や枯れ枝を落して、土を肥やしつづけている。

語ってくれたことがある。

「私はまだ少年でしたが、父親のあとについてこの木を植えました。最初はスクスクとよく育ち、たいへんうれしかったのです。ところがその後、だんだん背が低くなり、太さも縮んでしまいました」。

日本の専門家がこの小老樹を切って年輪などを調査した結果、馬さんの話が裏付けられた。最初の10～15年は年輪幅が広く、このポプラが順調に育ったことを示している。問題はその後で、年輪が乱れ、ほとんど生育しない年もでてくるのである。

苗が小さいあいだは水の必要量も多くないので順調に生育できるが、大きくなればなるほど水の必要量がふえ、水が不足する。平面に密植しているので、となりの木と根が重なりあい、水を奪いあう。そんなところで早魃の年がくると、ポプラは先端を枯らしてしまう。まるで自分の生命を守るため、意図的に枯らしているように。

それでも下部は生きており、枝の1本が幹に代わって伸びはじめる。また早魃になると、先端を枯らして生き延びる。そのことを繰り返すうちに、ポプラとは思えない、グニャグニャの姿になり、弱っているところにカミキリムシの幼虫がはいり、満身創痍になってしまったのである。

この20年ほどのあいだに植えられたポプラが、はじめはよく育っているのに、その後の早魃の年に先端部を枯らしていくのを、自分の目でもたびたび見ている。馬さんがいうように、だんだん樹高が低くなるのだ。小老樹の年輪を調べてみても、直径が縮むことはないのだけれども、大きな期待をもって植えた人が、そのように感じるのも無理はない。

ポプラは成長の速い木だが、そのぶん多くの水を必要とする。年間降水量400mmの土地にそのような樹木を密植したのがそもそも問題だったのである。技術や工夫で緑化の成功率を高めることはできるし、それは不可欠のことでもあるが、技術や工夫によって自然の限界を超えることはできない。苗木が小さく、かつ短い期間なら人工的な灌水などで樹木を育てることも可能だろうが、長期に持続することは不可能である。小老樹はこうしたことの生きた証人である。

【自分は育たなくても土を肥やす】

小老樹の生い立ちを知った私は、暗澹とした思いでそのなかに入った。最初に気づいたのは足の裏の感触である。土が軟らかい。スコップを取り寄せて掘ってみると、かなりの深さまで土が黒くなっている。そこに数十年も樹木があったのは偉大なことで、毎年、枯れ葉や枯れ枝を落しては、土を肥やしてきたのだ。

近年はその小老樹の林が減っている。開墾して、果樹園などにつくりかえているのである。私たちがこの協力活動のなかで苗圃と果樹園を建設したが、その土地は小老樹の林だった。樹木のない荒れ地に比べれば、はるかに土壌が肥えているのである。

植林としてみたとき、小老樹は成功とはいえないだろう。しかし厳しい条件のもとで懸命に生きる小老樹を、私はとてもいとしく思う。そして、ボランティアツアーの参加者などに、機会あるたびにこう語りかける。

「日本でも中国でも、おじいちゃん、おばあちゃんが勝手な買い物をして、無駄遣いをしているようなものですが、つかっているクレジットカードは孫の名義です。あとの世代に負担を押しつけています。それにくらべると、小老樹はえらい。自分は十分に育たなかったけれども、のちの世代のために土を豊かにしているのです」。そういう文章を書いたこともあり、翻訳されて大同の新聞に掲載された。

最近になって、別の災難が小老樹を襲っている。生活燃料として燃やすために、盗伐されているのである。最近はずこしおさまったようだが、世界的な原油高がつづいた。それに引っ張られるかたちで石炭価格が急騰し、2000年に1トン60元だったものが、2008年末には850元にもなった。8年間で、なんと14倍！ 大同は中国一の石炭の街で、農村でも石炭を炊くことが多かった。ところが、ここまで高くなると、農民は石炭を買うことができない。しかたなく、小老樹の林に向かったのである。「風が吹けば桶屋がもうかる」というが、現代の世界はそれよりずっと広い範囲で、ずっと緊密に結びつけられているようだ。グローバル化が環境にもたらす影響は、悪いことのほうが多いのではないだろうか。

((特活) 緑の地球ネットワーク 高見邦雄)